

## 小崎晃義先生のご逝去を悼んで

本会の会長であられた小崎晃義先生の訃報に接したのは5月25日のことでした。以前より腎臓に疾患を抱え、週に3度の透析治療を受けながら、辛い顔一つ見せずに授業と研究に取り組む先生の姿を、畏敬の念のみならず感動すらも覚えながら眺めて参った私は、今回癌が見つかって入院されたと知らされた時も、そしてそのステージもかなり進んだものだと知らされるにいたってもなお、もしやあの小崎先生ならば、この病魔にも奇跡的に打ち勝ち、再び元気な顔を私たちの前に見せてくれるのではないかと、一縷の望みを抱いておりました。しかし、残念ながら、その望みが現実となることはついにありませんでした。

小崎先生と私は、1990年の文学部外国語学科ロシア語専攻開設以来の同僚という関係でした。片や経済学、片や文学と、その専門とする領域の違いはあったものの、いつも私が感心させられたのは、小崎先生の書く論文の、その美しさでした。統計データの綿密な分析に基づき、ソ連崩壊後の政治も経済も混乱したロシアの社会構造を、そしてそこに暮らす人々が抱える問題の姿を、明解かつ鮮やかに描き出して見せるその論文は、術学趣味などはおよそ無縁の、無駄な言葉を一切排した文体で書かれてありました。その美しさには、まさに数学の証明問題の名答案の持つ美しさに通じるものがありました。そしてそれはまたそのまま小崎先生の生き方の美しさでもあったように思います。

小崎先生は創価学園から1977年、第7期生として創価大学経済学部に入られ、大学院を経たのち、すでに述べたとおり、1990年、文学部外国語学科ロシア語専攻の開設に際して専任教員として就任されました。以来、ソ連東欧貿易会（現ロシア NIS 貿易会）の嘱託研究員の職も兼務する立場を生かしながら、ロシアの社会や経済の新鮮な情報を学生たちに教室で提供し、優秀な人材を多数輩出されてきたことは私から敢えて紹介すべくもないでしょう。

特筆すべきは、それら専門とする領域での教育・研究活動と並んで、先生が学生の語学力の育成にも力を注いでくださっていたことです。すなわち専任教員として就任早々に、その卓越した語学力と行動力を発揮してロシアの諸大学と直接交渉し、幾多の留学プログラムを切り拓いてくださったことです。自身、学部生時代にモスクワ大学への交換留学生として派遣された経験を持つ先生は、後輩の学生たちに少しでも多くの留学の機会を設けてあげたいとの思いを、教員の誰よりも強くもっていらしたのだらうと思います。ご存じない方も多いかと思いますが、現在も続いているウラジオストクの極東国立大学（現在の極東連邦大学）との交換留学は、当時外国人に対して開放されてまだ間もないウラジオストクに小崎先生がいち早く単身乗り込み、お一人の力で切り拓いてくださったものに他なりません。その後、持病の悪化もあり、それまでのように直接ロシアに乗りこんで活躍するということができな

くなられてからは、専ら学内での授業と研究とに全エネルギーを傾注されるようになり、その研究領域も、ロシアからユーラシアへと広げられるなど、研究者としての成長を不断に続けようとするその真摯な生きざまには、まさに周囲を圧倒するものがありました。

63歳という若さでお亡くなりになられたことは返す返すも残念と言うよりほかはなく、私ども同僚、ひいては創価大学にとって大きな痛手でもありますが、小崎先生の、この「美しい生き方」に感銘し、その遺志を引き継いで学究の道と、またロシアとの交流拡大の道に進んでくれる方が一人でも多く創大生の中から育ってくれることを、故人は霊山の上から、願っておられるものと私は信じます。

心より小崎先生のご冥福を祈り、悼辞とさせていただきます。

合 掌

創価大学ロシア・スラヴ学会会長 佐々木 精 治